

立春大吉

本来、節分というのは立春・立夏・立秋・立冬の前の日のことを指します。旧暦では立春の頃が一年の始めとされ、重要視されました。立春を新年とすると節分は大晦日に相当します。そのため、現在でも節分のことを「年越し」という地域があります。

栃木県では足利市の鏝阿寺で節分の日に開催される「鏝年越し」が有名です。これは、足利尊氏から遡ること五代前の足利泰氏（鎌倉時代中期）の頃、坂東武者五百騎を鏝阿寺南大門前に勢ぞろいさせたことから始まった行事とされており、この日の夜は、鏝兜を付けた武者たちが、保元・平治の乱絵巻のように大通りを練り歩き、鏝阿寺で豆まきをします。この豆撒きは、本来は「追儼」という宮中の行事で、大晦日に行われていました。

なぜ、「豆撒き」、「追儼」を行ったかというところ、季節の変わり目、季の境目（隙間）は魔物が侵入しやすいと考えられています。そのため、邪気を祓い、身を守るために豆を撒きました。豆は炒ったものを使います。豆を炒ると爆ぜますがその破裂音も厄除けになると考えられていました。また、柊（ひいらぎ）の頭を刺し門口に飾るのは節

分の夜に「かく鼻」という鬼が現れ、家々を巡って人をさらって食べたらしいのですが、その鬼が嫌うのがイワシの臭いで、この臭いと柊の棘で鬼を寄せ付けないようにしたといわれています。

節分が過ぎると「立春」となります。立春が一年の始めとされ、この日が起点となり、この日から八十八夜、二百十日などと数えます。また、暦上はこの日から春となり、梅の花が咲き始め、だんだん暖かくなる春の始まりとされています。立春の早朝、禅寺では入口に「立春大吉」と書いたお札を貼る風習があり、家の鬼門にこの札を貼るご家庭もあります。この「立春大吉」は、四文字ともその文字が左右対称で縁起が良く、一年間災難にあわない吉祥句と言われているとされています。また、宮中では、新年の稲の豊作を天神地祇に祈る祭りがあり、その年中行事を「祈年祭」といいました。起源はよくわからないのですが、『延喜式』には二月四日に祭日を定めており、この神様を祭る神社は全国三、一三二座で、このうち各国で国司が祭る神社は二、三九五座あったことが記されています。

その中には、現在の栃木市に所在する国指定史跡下野国府の北側に祭られている（総社）「大神神社」も入っていると考えられます。本来、古代の国司は各国内の全ての神社を一宮から順に巡拝していましたが、国府のそばに総社を設け国内の神様をまとめて祭り、作業を簡素化しました。この下野国総社は、奈良時代から「室の八嶋」として『万葉集』や『古今和歌集』をはじめとする多くの和歌集に登場します。「暮るる夜は 衛士のたく火を それと見よ 室の八嶋も 都ならねば」藤原定家（『新勅撰和歌集』）。歌枕の意味は、「燃え上がる恋の炎に身を焼く煙」と情熱的な恋の歌です。江戸時代には、松尾芭蕉と門人曾良もこの地を訪れています。

※旧暦の元日は立春の頃で、立春の日とは限りません。



下野市教育委員会 文化課

